第74回 県展審査評

「正統の書」経てこそ

書道　審査員　片岡重和　日比野実

これまで培ってきた練度からくる作品が多く、全般に力感、迫力があった。レベルが高く審査は困難を極めた。

漢字は、古典に倣った作品作りの勉強をしているものは安心感があった。少字数では気合のこもった作品に見るものがあった。多字数は安定したものが多いが、躓きが多々見られたのが惜しい。仮名は比較的良くできていたが、練習量による枚数で完成度が変わってきたように思った。加えて料紙の選択を大切にしたい。近代詩文書は流動性と構築性の二面性があり、進取の作品を期待したが県展を代表するような作品に出合えなかった。

特選は4点。西内可々「炎」。この作品は存在感がビカイチだった。黒が黒いという強さを発揮している作品で、胆力を感じる立派な作品。

岡林御舟「甘州即事」。欠点が一つもない練達の作品だ。多字数でも4行になると集中力が途切れがちだが貫通している。普段の鍛練がないとできない。

佐藤美子「山家集より」。朝風の色彩と現代風の繊細さがマッチして強弱、濃淡、大小の組み合わせが素晴らしい。1字目から最後まで緊張感が切れることなく気脈が通じているところは、なかなかできることではない。

県美術振興会奨励賞も受賞した上岡まゆみ「初水代」。1字1字の文字の組み方に崩れがない。作品作りのツボを心得た高い力量の持ち主だと感じる。乾敦子「しざし」。筆と紙との当たり具合が優れていて、線は艶やかで、体ごと使って線を引いている相当の熟練者でないとできないことだ。

沢田白洋「正岡子規の歌」。筆で書き上げているから白が線に厚みを出す一方、文字の幅と線の流れに十分気をつけた技術を感じる作品。米津有舟「百代の過客」は、重厚の流れが美しい。縦横の振幅が際立ってさわやかな白が現れている。河添椒一風人」は、白を意識した現代感覚あふれる作品。構成が良く空気感が出ている。田井美蛍「蛍」は、素直さがそのまま美しい作品に反映している。

作品の中に作為的な筆遣いやデザイン、効果を狙って正しい文字になっていない作品が目に付いた。まずは正統の書を指し、その上で表現の世界に向かってもらいたい。（談）

川谷横雲賞

「禅語」吉田恭子（香美市）

伝えたい表現 明快に

グラフィックデザイン　審査員　U・G・サトー

高知の展覧会に招かれたのは初めて。作品に目を通して、南国らしさを感じた。大胆に、ずばりと表現したところがある。

ポスターは、通りすがりの人の目を一瞬にして射て、何であるかを表現するもの。限られた画面の中に、作者が伝えたい表現が分かりやすく収まっているかどうか。ぱっと見て「ぴん」と心の中に入ってくれれば成功だ。

特選に選んだ土居小梅「秋風のラッソング（弾き語りコンサート告知ポスター）」は、2人の女性の表情をアップで魅惑的に捉えている。専門家風ではないところが逆に魅力。文字の入れ方も、歌が流れているような感じで動きがある。技巧的で変化に富んだ背景が、シンボルになりがちな画面に変化を与えている。表現が過剰でないところも良い。

山六郎賞の水田貴士「禁煙啓発ポスター」は、たばこの煙の表現が、見る人に不思議な印象を与える。「NO SMOKING」の文字も、すんなり入ってきて分かりやすい。

山六郎賞

「禁煙啓発ポスター」水田貴士（南国市）

褒状は5点。県美術振興会奨励賞も受賞した福原佐知子「Tropic Alei-a new style craft beer」は、複雑な植物と大きな鳥が絡み合う立体で作ったところに、にぎやかな情景。丁寧な表現だ。緑と赤が、うまく調和している。

和泉なぎさ「FASHION SHOW 告知ポスター」は針金を用いた立体技法で、ファッションショーを表現した。音楽性をのぞかせたところが面白く、楽しい。

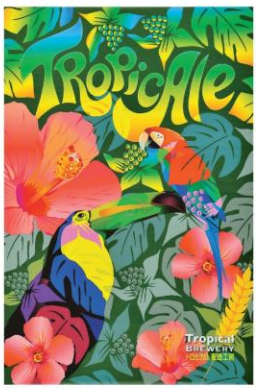
浜田唇「ポスター『LOVE FOREVER』」は、砂浜の石などを使い、古代文字風に「愛」を表現した。素朴で楽しい。石こう風に固めたパックと合っている。ほかに例がない、独特な作品だ。

池知隆「ふる里へ帰ってきいやは、複数の場面の絵で構成されており、それぞれがうまい。細部にも力を入れている。しかも見て楽しい。この路線でいろいろやれば、売れっ子になると思う。

徳久茂「剣道PRポスター『コロナに勝て』」は、剣道着姿の勇ましい男。布と金属を使って実際に立体で作ったところに、すごみを感じる。これは、この作者にしかできない。強烈で、訴える力がある。（談）

褒状　県美術振興会奨励賞

「TropicAle—a new style craft beer」福原佐知子（高知市）



めでられることも大切

工芸　審査員　山崎剛

技術がしっかりした作品が多く、レベルが高い。全国的に見てもクオリティーの高い地域だと思う。変に新しいことに走った作品が少なく、各分野で技術を押さえてやろうという姿勢が見られたのは良かった。

最も出品数が多い焼き物は技術は高い水準だが、突出したものが少ない印象を受けた。作品としての力を磨いていってほしい。

押し花は、絵画的表現を出し過ぎるあまり花のイメージが消えてしまったものもあった。七宝は表現の強さに物足りなさが残った。和紙の染色やパッチワーク、木工にもデザインや技術に目を引く作品があった。

特選は2点。岡崎壮「硝子の花」は、ガラスの内側に繊細な花のフォームを包み込み、高い技術を持っていることがよく分かる。葉脈の表現も文句ない。彫刻的な力も備わっていて立体造形だけでいる。植物の色を塗るのでなく、透明感を大事にしているのは、鑑賞者に色をイメージしてもらおうという思いが投影されているのではないか。

村岡純子「好日」は、伝統工芸の技術にのっとり、つぐの技を十分に発揮できている。文様の構成や色彩もタイルにふさわしく、リズム感がある。デザインが端正で、身にまとって映えることが想像できる。非常に優れた作品だ。

工芸は、作品の全体の形を見せやすく展示するが、身に着けたり、飾ったりという実際に使われるイメージも重要な要素だ。

褒状は10点。いくつか紹介すると、県美術振興会奨励賞に繊細な山本裕子「友禅への想いⅠ」は、過去の友禅をしっかり勉強し、アレンジしているのがよく分かる。例えば、柄の葉の表現も加賀友禅の虫喰いの技法を使って、色変わりを巧みに表現している。

宮内恵子「悠久」は色が美しくなれていてバランスが良く質の高い作品で、何より繊細さを表現している。

褒状　県美術振興会奨励賞

「友禅への想いⅠ」山本裕子（高知市）

爽快さや驚きが欲しい

先端美術　審査員　篠原資明

選考の基準は発想の面白さと、仕上がりの完成度。発想はある種のインパクトがあっても、仕上がりまでしっかりしている作品は少なく残念。少し発想が古い作品も賞から外させてもらった。

新型コロナウイルスに関する作品は多くあった。だが言葉だけ「コロナ」と言っても、今の状況に対して自分がどういう立場を取るのか、どうアートにするのか不分明な作品が多かった。

特選の中尾敏幸「コロナ敗密　私の秘密」は屋外作品。一見ドラム缶が四つ置いてあるだけのようだが、近づいて中をのぞき込むと、コロナ禍での作家の脳内の光景を表現している。「秘密」だから、それが何を表現しているのかは僕もわからないが、「現代アートの特徴の一つは、一つの答えじゃなく、いろんな角度から考えさせること。この作品は頭の中で〝広がり感〟があり、驚きの要素もあった。

褒状は3点。井関さおりの「ますく」は、映像作品。手を替え品を替えて現代の話題を取り上げながら、マスクの掛け方を通して風刺している点が面白い。風刺ばかりが表に出てユーモアがないと作品が陳腐になるが、きちんと芸術的表現になっていた。

池内準也「起点」は屋外の造形作品。仕上がり感が半端ではなかった。起点から広がっていくイメージが面白い。審査した際（雨が降った後の水滴が載っていた。屋外に展示する意味がはっきりとあった。

山中悠重「カラフル的%」。リンゴなのだが、絵本のものを立体にしたような、これは何だろうと思わせる作品。面白さと仕上がりがしっかりしていた。ユニークな発想から会場にあっていいのではと、バランスも考えて選んだ。

特選作品で、褒状の「ますく」は文句なしに選んだ。バリエーションという点では展示作品は幅広く、見る人に楽しんでもらえるのではないか。

アートは、見た人がある種、自分で答えを見つけるような作品も最近多いが、僕はあまり意味がないと思っている。

良い発想を思い付いたら、発想の中身をできるだけ明確にまとめ、しっかりとアートとしての表現に仕上げること。あまりこちゃこちゃすると、手を打ったようなアートの喜びはなくなってしまう。（談）